

Title	日本庭園史と時代区分:「大勢三転考」に呼応する日本庭園様式の変遷
Author(s)	村上, 公久
Citation	聖学院大学論叢, 第 28 巻第 1 号, 2015.10 : 13 -31
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5529
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

日本庭園史と時代区分

——「大勢三転考」に呼応する日本庭園様式の変遷——

村 上 公 久

抄 録

庭園様式の変遷には、時代精神の変化が反映している。英語による講義などにおいて非日本人に日本庭園の歴史、特に日本庭園の様式の変遷を説明する際、グローバルに受け容れられる日本庭園史の時代区分が必要になる。これまで学校教育でも用いられてきた従来の日本史の時代区分は、奈良時代・鎌倉時代・江戸時代などの政治権力の地理上の所在地を並べたものであって、その時代名によっては庭園様式に変化を与えた時代精神の変遷を窺い知ることは出来ない。しかしこれまで殆ど全ての日本庭園史は、時代区分を従来の日本史の時代区分に依っている。この問題に関して、政治形態の変革によって時代区分を図った伊達千広（1802～1877）による「大勢三転考」（1848）は骨の代、職の代、名の代と「カバネ」、「ツカサ」、「ミョウ」の時代区分をし、政治形態の変革によって各画期を定めるという客観的で本格的な歴史区分であり、日本庭園史の時代区分に有効である。

本試論は、19世紀の中葉に伊達が著した三転考にそれ以後の明治維新以降の時代を「衆の時代（代）」として加え本邦の歴史を四転考によって捉え、各時代名に対応する英語名を付すことにより、具体的な必要としては英語講義のための日本庭園史の時代区分とした。

キーワード：日本庭園，日本庭園史，時代区分，大勢三転考

1. 日本庭園史時代区分の試み（本試論の意図）

「見えるものは、目に見えているものから出来たのではないことが分かるのです」

新約聖書 ヘブル人への手紙 11：3b（新共同訳）

“... what is seen was made from things that are invisible.”

Heb 11: 3b

本試論は、日本庭園の庭園様式の変遷を明瞭に理解するために必要な日本庭園史の新しい時代区分を試みた論考の一部である。これまで殆ど全ての日本庭園史の時代区分は従来の日本史の時代区分に依っている。この研究の意図は、庭園様式の変化は時代精神の変化の反映であると観て、目に見える庭園様式の変化の背後にあって様式を変化させた目に見えない各時代の人々の自然観、歴史観、価値観が結晶化した時代精神の移り変わりを捉え、庭園史の時代区分を明らかにしようとするものである。

これは筆者の専門分野での研究結果の記述ではなく、一大学教員として教学上の必要に迫られての試論である。筆者は2007年に、海外にある複数の姉妹校からの交換留学生や英語力のある留学生また帰国子女などを対象として開設された「日本学科目」JSP Japan Studies Programの運営に協力して、二つの英語による講義科目を開講した。その中の一つがJapanese View of Nature and Landscape Architecture（日本人の自然観と修景論）という英語名称の講義科目である。

同講義科目を日本理解のために開講した理由を略述すれば、以下ようになる。前掲の新約聖書ヘブル書にあるように「見えるものは、見えないものから出た」のであり、目に見える日本庭園を鑑賞し理解を深めることによりその背後にある日本人の自然観と世界観を探ることは日本理解に役立つ。例えば、イスラム庭園と西洋庭園のデザインは「直線」によって構成されているが日本庭園のデザインと修景は「曲線」による。曲線から成る自然 nature に人為 art である「直線」が切り込んで文明は構築されてゆく。イスラム庭園と西洋庭園のレイアウトは対称形であるが、日本庭園は非対称形である。この違いもそれぞれの庭園の背後にある自然観の違いの反映である。筆者は、自然観の違いについて3つの型を提示している^{(1),(2)}。それぞれ nature-over-man（未開：自然が、未文明の人間を支配）、man-over-nature（文明：人間が、文明によって自然を支配）、man-in-nature（共存：自然の中に共生している人間）であり、直線から成る対称形のイスラム庭園と西洋庭園は人為が自然を支配する文明の自然観を反映し、曲線から成る非対称の日本庭園は自然の中に和らいで暮らす自然観を反映している。

西洋庭園（ヴェルサイユ宮殿の庭）と日本庭園（桂離宮 月波樓の庭）



以上に述べたこの英語講義科目の意図を簡略に記し同 JSP 科目の講義概要（聖学院大学 科目解説英文シラバス）として以下のように開講以来公開してきた。

授業科目名 Japanese View of Nature and Landscape Architecture

講義の目標及び概要 Course Description/Objectives

Gardens are a reflection of people's view of nature and view of life. When we appreciate gardens, we may come close to the view of nature or the sense of values behind the gardens layout derived from those values. Furthermore, we may learn religious perspective from certain types of gardens as in the case of the asymmetrical rock gardens of Zen Buddhism in Japan, which are quite different from the symmetrical flower gardens of the West.

Gardens well represent the relationship between man and nature. We may learn a variety of views of nature among the racial, ethnic, religious groups from the study of the gardens of the world. Then we may discover a new perspective for the comparative study of those groups through garden study. And we may approach to the better and more profound understanding of Japan through the study of her unique gardens.

この英文シラバスの骨子は、「庭園は人々の自然観と人生観を反映している。庭を鑑賞すれば、私たちは見えない世界観や価値観が形を取って顕われている庭園を通してその背後にある自然観と人生観に近付くことが出来るかも知れない」というアプローチにある。

この講義においては日本庭園の変遷について解説することが不可欠であるが、開講以来本 2015 年度の講義に至るまで過去 9 年間「日本庭園史の時代区分」を非日本人に講義する困難に直面してきた。

庭園様式の変遷には、時代精神の変化が反映している。英語による講義において非日本人に日本庭園の歴史、特に日本庭園の様式の変遷を説明する際、各庭園様式の背後にある cultural climate を明瞭に反映したグローバルに受け容れられる日本庭園史の時代区分が必要になる。これまで一般に広く用いられてきた従来の日本史の時代区分は、奈良時代・鎌倉時代・江戸時代などの政治権力の地理上の所在地言い換えれば政治センターの地名を並べたものであって、その時代名によっては庭園様式に変化を与えた時代精神の変遷を窺い知ることは出来ない*。

先ず、この講義には当然英語による「日本庭園の歴史」の変遷の解説と、日本庭園の様式の変遷と日本の歴史の「時代区分」との関連の説明が必要であるが、「庭園史」の時代区分と従来の「日

* 室町時代をさらに区分して、政治センターの地名ではない南北朝時代と戦国時代という中国史の二つの時代を本邦の時代区分に導入して挿入するなど、時代呼称に統一がない。

本史」の時代区分が整合しない^{**}。そこで、非日本人にも理解でき（グローバルに通用する）、「庭園史」にも整合する日本の歴史の英語による「時代区分」が必要となる。ところが、従来の一般的な日本の歴史の時代区分は、庭園に現れた時代の精神とは無関係であり、さらに政治権力の所在地を地理的な名称で時代呼称としただけのものであって、特に非日本人には理解できないものである。しかしこれまで殆ど全ての日本庭園史は、時代区分を従来の政治センター所在地の時代区分に依っている。またいくつかの日本文化史の時代区分もこの点において有効ではない。

日本庭園史の専門分野においても、庭園史の時代区分が見当たらない。例えば重森三玲（1896-1975）による大著「日本庭園史大系」（全35巻）は全国の名園を克明に鳥瞰でき、またそれらの詳細を各庭園の実測図によっても知ることが出来る唯一の文献である。同大系によってわが国の庭園を総覧できた各庭園について詳細を知ることができる。豊富な資料を擁し、庭を把握するのに不可欠な実測図と写真も完備している同大系には別巻が付いており、その第34巻（別巻第1）「日本庭園史年表他」また膨大な日本庭園の資料を擁する資料編があるが、その何れにおいても「日本庭園史の時代区分」は試みられてはならず、ただ従来の政治センターの地名による時代区分を踏襲するに留まっている⁽³⁾。

この問題に関して、日本の歴史は「時の勢」によって二度の大変化を遂げたと観て時代区分を図った伊達千広（1802～1877）による『大勢三転考』（1848）は、骨の代、職の代、名の代と「カバネ」、
「ツカサ」、
「ミョウ」の時代区分をし、政治形態の変革によって各画期を定めるという客観的で本格的な歴史区分であり、各時代の人々の自然観、歴史観、価値観が結晶化した時代精神の移り変わりを捉える手掛かりとなり、日本庭園史の時代区分に援用可能である。

本稿では、19世紀中葉の幕末期に伊達が著した三転考に、筆者が明治維新以降の時代を「衆の時代（代）」として加え、本邦の歴史を四転考によって捉え、これに各時代名に対応する英語の名称を付すことにより、英語による講義 Japanese View of Nature and Landscape Architecture（日本人の自然観と修景論）中で用いる日本庭園史の時代区分を試みた。

2. 『大勢三転考』による時代区分（庭園史の時代区分への手掛かり）

三転考と伊達千広

幕末期の開明的な国学者伊達千広（1802～1877）は、上古から徳川幕藩体制の成立に至る日本の

^{**} 例えば、庭園様式の変化に関しては桃山時代と江戸時代の境は1625年ごろであり、政治センターの地名による時代区分とは四半世紀の差がある。安土桃山時代は関ヶ原の戦いと江戸幕府の創始の時期に終わるが、その文化は江戸時代の初期に及んでいる。従来の時代区分が庭園史の時代区分に一致しない。

歴史が、「加婆欄」つまり「骨（かばね）」の時代、「都加佐」すなわち「職（つかさ）」の時代、「名（な／みょう）」という大名や小名の時代と大きく「三転（みうつり）」、つまり3回変わったと観た。我が国の歴史は「時の勢」によって二度の大変化を遂げたと洞察し時代区分を図った伊達千広による『大勢三転考』（1848）は、骨の代、職の代、名の代とそれぞれ「カバネ」、「ツカサ」、「ナ／ミョウ」の時代区分をし、政治形態の変革によって各画期を定めるという客観的で本格的な歴史区分であり、筆者が求める日本庭園史の時代区分に援用可能である。幕末期に伊達が著した三転考を承けて明治維新以降の時代を「衆の時代（代）」として加え本邦の歴史を四転考によって捉え、これに各時代名に対応する英語名を付すことにより、2007年に開講した英語による講義 Japanese View of Nature and Landscape Architecture（日本人の自然観と修景論）中の日本庭園史の時代区分を試みた。

主権国家（国民国家・近代国家）nation state の概念は、伊達千広が「三転考」を脱稿した年のちょうど二世紀前に成ったウェストファリア条約（1648）を契機に、また実質としてはフランス革命以降に形成された。しかし歴史の叙述は、近代の国家概念が成立するはるか以前から、狭義の政治的勢力としての「国家」を強く意識するところから始まっている。「史書」（「史料」と区別される）は記録と回顧のために記述されてきたが、真の目的としてはさらに国家の将来を展望しその運命共同体の進むべき方向を指し示すために叙述されてきた。それまでの経路と現位置、そして未来への道を示すのが「史書」の本来の目的である。

内藤湖南は著書『先哲の学問』の中で「白石の一遺聞に就いて」という史論的文章を書き起こし⁽⁴⁾、その中で『愚管抄』より『神皇正統記』の方が、明確に人々に国家の進むべき道を指し示し改革の志向をもつ点でより優れている、と述べている。湖南はまた、新井白石の『読史余論』よりも伊達千広の『大勢三転考』の方が、優れていると指摘するが、前者が支配勢力の交代という表面流に目を留めているのに対し、後者が目に付く歴史事象の表面に騒ぎ立つ「波」ではなく、支配制度の変化という言わば歴史の大きな流れの「海流」に着目した点で、より優れていると観ている。『大勢三転考』は、千広にとっての同時代を「名（な／みょう）の代（よ）の熟成期」と踏まえた上で改革の志向を持って未来を展望しているという点で、史書として高く評価すべきものである。

『大勢三転考』は、明治の外務大臣陸奥宗光の実父として知られている紀州藩重臣で国学者である伊達千広（宗広）が幕末の嘉永元年（1848年）に著した歴史書（歴史評論）である。伊達千広は重臣として藩政の実務を担い財政再建に精励していたが、彼はまた本居大平（宣長の養子）門下の国学者でもあった。藩内の政争で失脚して長く幽閉状態に置かれたが実子陸奥宗光の明治新政府への登用もあって免罪となり紀州を離れて東京へ移った。『大勢三転考』は千広が同書を脱稿した直後に失脚したことで日の目を見なかったが、津和野藩出身で東京女子師範学校の第2代摂理（校

長)を務めた神祇官の福羽美静が東京の陸奥邸で偶然この書を発見し、その価値を認め明治6年(1873)に刊行された。

『大勢三転考』は、神武天皇即位から江戸幕府の成立に至るまでの歴史を三時代に区分して各時代の特徴と変遷を江戸時代末期に通史的に叙述した歴史書で、特に客観的な時代区分を示した点で秀逸なわが国の歴史理解である。同書は嘉永元年(1848)6月に完成したが、その執筆の目的が千広自身の研究の便宜のためであったので、公刊されることはなかった。前述した福羽美静による「発見」を契機として、明治六年(1873)になって養嗣子伊達宗興や実子で外務大臣となった陸奥宗光の懇請により和本三冊本として公刊された。

『大勢三転考』で千広は「時代区分」について、古代より江戸幕府成立に至るまでの歴史を「上つ代」「中つ代」「下つ代」の三時代に区分して、それにおおの政治制度にもとづいて内容規定を与え、「上つ代」を「骨(かばね)の代」、「中つ代」を「職(つかさ)の代」、「下つ代」を「名(な/みょう)の代」としている。第一の「骨の代」はカバネをもって世を治めた時代である。千広は、神武天皇が国造・県主を設置したのがカバネのはじめであり、氏が血脈の流れであるのに対して、居地と職掌とからできた種々のカバネは、身体にたとえると骨に相当するものであり、その職務は各家々を通じて世襲される日本独自の制度であると述べている。「骨の代」は推古天皇の冠位十二階・『十七条憲法』の制定によって、第二の「職の代」に変わり始め、天武天皇十三年(684)に「骨」は廃止され、『大宝律令』の制定によって、時代は官職をもって世の政治が行われる「職の代」に移行したとする。第三の「名の代」は大名・小名が土地を領有して世を治める時代であり、文治元年(1185)源頼朝が国に守護、荘園に地頭を置き、これを統率して六十余州総追捕使になってから「職の代」は「名の代」に変わったとする。

伊達千広はこのような時代区分を行い、また「骨の代」から「職の代」への変化、「職の代」から「名の代」への時代転換についても論理的で明解な説明を加えている。「骨」から「職」の時代への変化は、「上の御心」(上からの改革)で実現したのに対して、「職」から「名」の時代への変動は「下より起りて」(下からの革命)もたらされたと捉えている。千広は、時代を区切る二度の大変動が起きた駆動力については、歴史の大きな流れのエネルギーの源となる人智では究められない「時勢」という力をあげている。

以下に、『大勢三転考』にある三つの時代に「衆の時代」を加え、四つの時代による時代区分を試み、各時代に英語の呼称を付して列記しておく。

四つの時代を列举し、各時代を代表する庭園様式を挙げれば以下のようになる。

「骨（かばね）の代（よ）」 The Age of Clans, The Age of Blood Relationship ～7C

氏姓制度の時代

The Age of Blood Relationship（飛鳥時代 The Asuka Period）

法制：古代固有法文化の時代

庭園様式：古代庭園 大陸庭園の模倣，神池・神島，流れ祭祀場，古墳などの池泉庭園の原型 環状列石 磐座・磐境（神々を表象）

「職（つかさ）の代」 The Age of Office, The Age of Official Postings 8～12C

律令制度の時代

The Age of Official Postings（奈良，平安時代 The Nara and The Heian Period）

法制：中国からの継受法文化の時代

庭園様式：大陸渡来の思想表現，池泉庭園に浄土を表現した浄土式庭園 神殿造り庭園 浄土式庭園 池泉庭園

「名（みょう）の代」 The Age of Titles The Age of Feudal Rank 12～19C

封建制度の時代

The Age of Feudal Rank（鎌倉，室町（南北朝・戦国），安土桃山，江戸時代 The Kamakura, Muromachi (Nanboku-Cho, Sengoku), Azuchi Momoyama, and The Edo Period)

法制：新固有法文化の時代

庭園様式：池泉回遊式庭園（大名庭園） 禅庭園（枯山水） 禅宗庭園 枯山水 茶道の庭 大名庭園

「衆（しゅう）の代」 The Age of People The Age of Democracy 19C～

大衆・市民の時代

The Age of Democracy（明治，大正，昭和，平成時代 The Meiji, Taisho, and The Showa Period）

法制：欧米からの継受法文化の時代

庭園様式：西洋庭園 和洋折衷庭園 市民公園

『大勢三転考』にある三つの時代の叙述を要約し，四つ目の時代を付加して各時代について庭園様式に影響した各時代の特徴を含めて以下に略述する。

最初の時代は「骨（カバネ）の時代」である。

「骨（カバネ）の時代」（「骨（加婆禰 かばね）の代」）

The Age of Clans* 氏姓制度の時代（The Age of Blood Relationship）

『大勢三転考』によれば、最初の時代は、「骨（かばね）の代」と呼ばれる古代の氏姓制度である。「骨の代」とは、古代の日本固有の法制文化に基づくもので、その基本は、「骨の代」とは、同じ祖先から出た血族、つまり「骨」が世襲的に土地を領有した時代を指す。国造（くにのみやつこ）・県主（あがたのぬし）などの「カバネ」を主軸に政治が行われた時代である。居地と職務が結合した血族集団を基礎とする体制で、これを身体に例えれば氏が血脈で骨は骨に相当し、その職務は、血縁的系譜の相承で子孫に受け継がれる。

しかし、やがて「領（し）めたる土地」から収穫された生産物を「己が物」と勝手に私有し、朝廷への貢租を怠り天皇の権威はないがしろにされた。そこで、冠位十二階の制度や十七条の憲法から大化の改新にかけて、世は「職の代」へ移ったと千広は述べている。

この「骨」は大化の改新を機に廃れていくことになる。「骨の代」は、天武天皇13年（684）に廃され、次の「職の代」に移って行くこととなる（なお、大化の改新の歴史的な重要性を最初に説いたのは、『大勢三転考』であるとされている）。「法制」という面から観れば「骨の時代」は古代固有法文化の時代であって、「骨」と「職」とを区分する「大宝律令」の完成公布（701）によって終わる。

「職（ツカサ）の時代」（「職（都加佐 つかさ）の代」）

The Age of Office 律令制度の時代（The Age of Official Postings）

『大勢三転考』によれば次の時代は、八色の姓制定以後の「職（つかさ）の代」と呼ばれる中古の律令制度である。これは上(天皇)主導に行われた変革であり、官職によって職務が定められて、血族と居住地と職務が一体化が薄らいだ時代とされる。「骨」は天武天皇十三年（684）に廃され「職の代」となる。「職の代」は、いわば朝廷から「官職」を与えられてはじめて地位と権限とが生ずる時代である。この684年とは年代記的に記せば、681年に律令（浄御原令）が作り始められ、682年に礼儀・言語の制が定められ、683年に諸国の境界が決められ、684年に諸氏の族姓を改めて八色の姓とされ、685年に親王諸王十二階・諸臣四十八階が定められている。これらの制度の変革が伊達の言う「職の代」の始まりであろう。

clan* と lineage について、文化人類学では集団のうち成員が互いの系譜関係あるいは共通祖先との系譜関係を把握している集団はリニエッジ (lineage) といい、伝説上・神話上の共通祖先を持っているという意識・信仰があるのみで系譜関係がはっきりしない集団をクラン (clan) と呼んで、両者を区別する。ここでは、英語による時代呼称に広義の意味でクランを採り The Age of Clans とした。

「職の代」は、7世紀末の天武・持統朝から8世紀の大宝律令で完成し、「部曲（かきべ）の民」（私有民）や「田荘（たどころ）」（私有地）は廃され土地はすべて公田と定められたのである。「骨の代」には特定の官職を世襲した氏族の統率者が、同時に官職を通して国政に参与していた陋習が「職の代」に改められ、政治を定める律令や世襲化されない官職の保有者が権力を担った。伊達千広は国学者らしく、儒教などの外来文化を批判しているが、律令が外来の法制であり輸入した統治法によって「職の代」が開かれたという点には十分には意識が及んでいない。

「骨の時代」の末期、わが国にとって最初の国際体験である古代日唐戦争の敗北（白村江の戦い 663 年）が、その直後に想定された外国勢力による我が国の国土への侵攻からの強い危機感の下、これに対抗し得る国家体制づくりに向かわせた。国防に急遽当たらねばならない混乱の中、内乱（壬申の乱）を抱えながら、遷都、律令の導入整備が行われた。この古代の危機が「骨の時代」を終わらせ「職の時代」を到来させた。これはアイデンティティの危機を伴うグローバルな体験でもあった。わが国はこの時期に「唐風」から脱した和風の独自の国づくりを目指し今日の日本を形成するプロセスに入った。

「名（ミヨウ）の時代」（「名（みょう）の代」）

The Age of Titles 封建制度の時代 The Age of Feudal Rank

『大勢三転考』によれば、最後に守護・地頭設置以後「名（みょう）の代」と呼ばれる中世の封建制度の時代が来る。これは下（武士）主導に行われた変革であり、大名・小名が実力で土地を支配する時代とされる。これが、千広の執筆当時の制度である幕藩体制に繋がってゆくことになる。千広は「名の代の大制度（江戸幕府・幕藩体制）、ここにして盛大なり」と締め括っている。英語での時代呼称を The Age of Titles とし、説明としては The Age of Feudal Rank とする。

源頼朝が文治元年（1185）全国に守護、荘園に地頭を置き、これを統率して六十余州総追捕使になって大名・小名が土地を領有する「な」の時代つまり「名の代」を始めたと解釈される。これは、権力の基礎が官職から「兵権」すなわち軍事力に変わる時代を指す。

『大勢三転考』は、鎌倉幕府に始まった「名の代」がその後、信長の「はかなき夢」の挫折や、秀吉の「馬を花山に放ち賜ふ心」（戦を止める決断）の欠如などで戦乱の時代が継続したが、徳川政権の全国統一によって安定した治世が実現したと述べ、「大小の国々、心一つに和順（まつら）ひ、大平無事の御代となりて、名の代の大制度、こゝにして盛大なり」と結んでいる。

この時代に入って中国からの継受法文化の時代が終わり、貞永元年の「貞永式目」（関東御成敗式目）の公布（1232）により新固有法の文化が形成された。「貞永式目」は「名の時代」の基本法

令として機能し、庭園様式の観点からはその基本思想として組み込まれた明恵の「人間は自然の一存在」という自然観が、「あるべきようは」という訓戒と共に日本人の思想の中に形成され、man-in-nature(共存:自然の中に共生している人間)の自然観による庭園様式を成立させた。「名の時代」は武家の質実剛健の気風を受け、また武家が帰依しその教養を育む源となった禅宗の強い影響を受け、man-in-natureの庭園様式をもたらした。この時期が日本庭園史において最大の画期であり名実ともに「日本庭園」が成立した時代である。

グローバル・ヒストリーの観点からは、世界史の同じ中世の時期にユーラシアの東西の端に同時に互いに酷似した封土制に基づく封建制が成立し、「つわもの」の集団が兵権によって新しい時代を開いた。わが国の「名の時代」の開始は、同時期に洋の東西に並行して成立した封建制に基づく「武士と騎士の時代」の東洋における展開である。梅棹忠夫は「近代日本文明の形成と発展」⁽⁵⁾において、御恩と奉公を基盤とする主従関係と中世ヨーロッパにおける領主と臣下の間に見られた保護と忠誠の相互契約に基づく関係の類似を指摘し、「さむらい」の倫理法典と騎士道との類似を見出している。ウィリアム・H. マクニールも『世界史』の中で、日本の封建制と中世ヨーロッパ封建制とが酷似しており、武士階級の台頭と騎士団の登場の類似を述べている(第Ⅱ部、16章「中世ヨーロッパと日本」)⁽⁶⁾。13世紀初頭にユーラシア大陸の中央部で興り強力な遠征軍によって急速に領土を拡張したモンゴル帝国が、ユーラシアの東端で武士団によって、また西端では騎士団によって侵攻を阻まれ撃退された。武士の時代は新しい文明の開化を促した。今日「日本的」といわれる有形無形の多くのものの起源はこの時代にある。英文による日本の通史⁽⁷⁾を書いた原勝郎は、日本の歴史と文化の理解には平安朝(「職の時代」)よりも武士の勃興(「名の時代」)を観ることが重要であることを述べている。この「名の時代」の気風が日本独自の庭園様式を創った。

「衆(シュウ)の時代」

Age of People 大衆の時代 Age of Democracy

千広が「大小の国々、心一つに和順(まつら)ひ、大平無事の御代となりて、名の代の大制度、こゝにして盛大なり」と締めくくった「名の代」は、やがて欧米の外圧を受けて徳川幕府と共に崩壊した。本試論では、千広の三つ目の時代を承け幕末・明治維新时期以降の時代を「衆の代」として、現代に至る四つの時代によって時代区分する。

“市民革命”ではない王政復古による明治維新ではあったが、大衆・市民が近代主権国家の形成に参画して行く時代を「衆の時代」とし、英語での時代呼称を The Age of People, 説明としては The Age of Democracy とする。

列強の植民地化の脅威の下、急速な近代化を図ったことはこの時代の庭園様式にも反映している。

「職の時代」に大陸からの律令の導入を図ったと同様に、明治維新时期には欧米から近代国家の憲法の導入を図り、再び「継受法」の時代に入った。帝国憲法も現行の新憲法も共に継受法であるので、法制から観ても現時点で記せば古代固本法から外来の律令の導入、国内基本法による統治、外来の近代憲法の導入と三度の節目を経て「大勢四転」となる。憲法は独立国が制定するものであるが、現在のわが国の混乱は、第二次世界大戦の敗北後まだ独立を回復していない時期に現行の日本国憲法を制定したという誤りに起因する。

3. 四転と庭園様式の変遷との呼応

骨の時代

「骨の時代」の文化

わが国が中国の王朝に積極的に朝貢し始めたのは前漢の頃からで、先進文化国だった中国から金属器（玉鏡、刀剣類など）や漢字、仏教などの文物と文化を受け入れ始めた。やがて遣隋使、遣唐使が大陸に派遣され、本邦の留学生は先進文化を学び、日本に持ち帰ってきた。日本固有の文化の上に大陸伝来の文化が取り入れられ「骨の時代」の日本文化が形成されていった。崇峻天皇5年(592年)から和銅3年(710年)の118年間にかけて宮・都は飛鳥に置かれていた。この時代は古墳時代の終末期と重なる。推古朝に飛鳥文化、天武・持統朝に白鳳文化が華開いた時代でもある。この時代に倭国（倭）から日本へ国号を変えたとされている。

「骨の時代」の庭園

古代庭園 大陸庭園の模倣

神池・神島、流れ祭祀場、古墳などの池泉庭園の原型

環状列石 磐座・磐境（神々を表象）

戦後しばらくの間、飛鳥・奈良期には日本庭園は存在しないといわれていたが、近年明日香村で飛鳥京跡宴池遺構などが発掘されその通説は否定された。庭園はまだ中国や朝鮮の影響を強く受けていたことが判明している。この時期の遺跡・遺構は厳密に言えば庭園の範疇には入らないが、それらの中で日本庭園の原初形態と考えられるものに、西日本に多くのこっている磐座（いわくら）・磐境（いわさか）や神池・神島、また東日本で発見された環状列石などがある。磐座は、巨石に対する畏敬の念から、そこに神々が鎮座するとみなした石である。磐境は、磐座をとりかこむ神域で、まったく自然のままのものもあれば、人為的に境界を置いたものもある。日本庭園の特徴である「石組」は、これら磐座・磐境が洗練昇華したものと考えられる。東日本に多い環状列石は、ユーラシア大陸の巨石記念物との関係や用途など不明な点が多いが、人為的に創作された意匠であることは

確かで、これもまた石組の原初形態と考えてよいであろう。のちの庭園で「蓬莱」など神聖な場が表現されるようになったのも、磐座・磐境の巨石信仰や環状列石にみられる石の不変性に対する信仰に端を発しているのではないかと考えられる。また、大きな池を大海原に見立て、その中にうかぶ島に神がやどると考えた神池・神島も信仰の対象であった。これらの神池・神島が、池泉形式の始まりと推測されている。

石と池の原初形態をあわせもった遺構として、三重県上野市の城之越遺跡がある。厳密には庭園ではなく、大溝祭祀場（さいしじょう：神聖な大きい流れのある祭祀場）としての施設ではないかと推測されているが、ゆるやかな曲線をもった流れ、張石状の洲浜的なふくらみ、立石をすえたような集団的な石組など、後世の庭園の要素がみられる。ただし、奈良を中心としてつくられはじめた日本庭園とは、年代的に300年以上の開きがあり、距離的にもはなれていることから、やはり庭園の原初形態というにとどまるであろう。

職の時代

「職の時代」の文化・政治・経済

710年に「奈良の都」の異名を持つ平城京に都が置かれたが740年から745年にかけて、聖武天皇は恭仁京（京都府木津川市）、難波京（大阪府大阪市）、紫香楽宮（滋賀県甲賀市信楽）に、それぞれ短い期間京を遷した。平城京は、中国の都長安を模した都を造営したとされ政治家や官僚が住民の大半を占める官製の計画都市であった。平城京への遷都に先立って完成公布された大宝律令（701）が、日本国内の実情に合うように多方面から改正されるなど、試行錯誤を行ない、律令国家・天皇中心の専制国家・中央集権を目指した時代であった。この時期の律令国家は、戸籍と計帳で人民を把握すると、租・庸・調と軍役を課した。遣唐使を度々送り、唐をはじめとする大陸の文物を導入した。全国に国分寺を建て、仏教的な天平文化が栄えた。『古事記』『日本書紀』『万葉集』など現存最古の史書・文学が登場した。この時代、中央では政争が多く起こり、東北では蝦夷との戦争が絶えなかった。

平安期は、前代（奈良期）からの中央集権的な律令政治と現実の乖離が大きくなっていき、9世紀末から10世紀初頭ごろ、政府は税収を確保するため、律令制の基本だった人別支配体制を改め、土地を対象に課税する支配体制へと大きく方針転換した。この方針転換は、民間の有力者に権限を委譲してこれを現地赴任の筆頭国司（受領）が統括することにより新たな支配体制を構築するものであり、王朝国家体制と呼ばれることがある。この国家体制期は、古代の末期とされるが、「三転考」の史観から観れば「名の時代」への移行期である。平氏政権の崩壊とともに、中央政府である朝廷とは別個に、内乱を収拾して東国の支配権を得た鎌倉幕府が登場し、平安時代「職の時代」は幕を下ろし「名の時代」へと移って行く。

「職の時代」の庭園

大陸渡来の思想表現 池泉庭園に浄土を表現した浄土式庭園

神殿造り庭園 浄土式庭園 池泉庭園

現在発掘によって発見された最古の庭園とされているのは飛鳥期の池泉庭園で、大陸で盛んにつくられたものとよく似ている。とくに、護岸の石積みや水をあつかうための精巧な石造品などは大陸のものと酷似している。奈良期にかけての遺跡からは曲水庭園も発掘されている。なかでも平城京（奈良市）の左京三条二坊宮跡で発掘された曲水の流れは、中国の曲水庭園や古瓦の竜の文様などによく似ており、大陸の影響が明らかである。しかしながら自然観や素材の違いなどのために、日本の庭園は徐々に大陸風を脱し、池を中心とした独自の意匠を確立していく。現存している平安期の池泉庭園の多くが、船上で宴をおこなったりする舟遊式の形式であるところからも、庭園は貴族文化の中で発達していったといえる。この時代から次第に曲線が中心の造形が増え、全体の様式が和式化された。また中島や州浜など日本庭園の特徴的な造景もこの時代から確認されている。この時代の代表的池泉庭園の例として、岩手県平泉町の毛越寺庭園、京都市右京区の嵯峨院（大覚寺）庭園、宇治の平等院庭園などがあげられる。その後鎌倉期からは、舟遊形式を継承しながらも、池の周りをめぐり歩くたのしみを考慮した回遊形式や、屋内にいて庭を鑑賞するための形式が出てくる。また中島や州浜など日本庭園の特徴的な造景もこの時代から確認されている。

貴族文化が栄えた時代で、貴族の邸宅・寝殿造りの庭がさかんに造られるようになった。しかし平安時代中期以降は、末法という時代が到来し、浄土式庭園様式に変化していった。

また平安時代末期には、日本最古の作庭秘伝書といわれる「作庭記」が著され、作庭手法も確立してきた。

これらの代表的な庭園としては、平城京左京三条二坊宮跡庭園、平等院、毛越寺庭園、京都西芳寺庭園、鹿苑寺庭園などがある。

名の時代

「名の時代」の文化・政治・経済

平氏政権が衰退して崩壊してゆくとともに、中央政府である朝廷とは別個に、内乱を收拾して東国の支配権を得た鎌倉幕府が登場し、「職の時代」が終わった。次の「名の時代」の文化の特徴は、以前の貴族文化が継続していたが、武士や庶民の新しい文化が発生し対抗した点で、文化の二元性が出てきたところにある。作風は、一般に素朴で質実、写実的と言われる。中国（宋・元）からの禅文化の影響も色濃い。今日の日本文化の直接の起源は、この「名の時代」に形成された文化である。現在の日本の文化・政治・経済の起源と形成の経緯を理解するには「名の時代」以前の日本まで遡る必要はなく、この時代まで遡ればよい。今日「日本的」といわれる文化の多くの起源がこの

時代にある。また、日本の近代化はこの「名の時代」から始まっている。徳川幕府の崩壊後の明治維新期に日本の近代化の開始を見るのは誤りであって、日本の近代化はこの時代に始まっていた。武士特有の文化が生まれ、合戦をテーマにした軍記物語も生まれた。日宋貿易が盛んでこの時代には禅宗僧の往来が頻繁で、禅宗とともに入った文化（精進料理、水墨画、喫茶の習慣など）はその後の日本文化の発展に大きな影響を与えた。天竜寺船、勘合貿易により中国との往来が続き、銅銭が大量輸入され、唐物が珍重された。室町期は戦乱の世であったが、東山文化の時代を中心にして、猿楽（能）、茶の湯、書院（書院造）などが発展した。政権が安定し、鎖国により外国と隔絶された日本では、平和な時期が長く続き、再び独自の文化が発達した。寺子屋や藩校の普及により読み書き算盤が広く浸透し、幕府奨励の儒学のほかに本草学などの自然科学が育った。庶民の間では芝居（歌舞伎、人形浄瑠璃）や刊行物（浮世草子、読本など）、そして浮世絵が愛好され、世俗的な文化が栄えた。大相撲興行が始まったのもこの頃である。また日本本来の伝統を捉え直そうという国学も興り、「名の時代」末期の幕末の尊皇攘夷運動の思想的土壌を作った。

「名の時代」の庭園

和風庭園の確立期

禅宗庭園 枯山水 茶道の庭 大名庭園（池泉回遊式庭園）

鎌倉幕府が成立して「名の時代」に入ると、貴族・武士階級の建築は「職の時代」の代表的な建築様式であった寝殿造りから、書院造りに変わっていった。それに伴い庭園も建物に隣接した書院造りとなった。それに対応して回遊式庭園が多くつくられるようになった。石組も「職の時代」の優美さが消え、時代相を反映して引き締まった豪健さが好まれるように変わって行く。『作庭記』にかわるこの時代の代表的な造園書『山水並野形図（さんすいならびにやぎょうず）』には新しい庭園に対する意欲がみられ、作庭家阿波阿闍梨静空（あわあじゃりせいこう）の弟子静玄は、鎌倉の二階堂に高さ3メートル余もある石組を立て、建久3年（1192）8月24日、源頼朝も見物に出かけたことが『吾妻鏡』に記されている。書院式庭園は寝殿造庭園に比べて規模が小さくて簡素だが、基本的には浄土式庭園の影響を受けた形態で始まっている。また中国から禅が伝わるようになり、日本庭園も大きく禅の影響を受けた。この時代に屋内から座視して観賞する観賞式池泉がこの時代に現れる。禅宗が隆盛を極め、枯山水庭園が発達した。枯山水の原型は既に平安時代からあったが、この時代になって禅寺の方丈庭園で発展し「名の時代」の代表的な庭園様式としての地位を確立した。独自の形式として池泉庭園にかわって出現したのが全庭にわたって水をつかわずに水の表現を試みる枯山水形式の庭園である。その土台となる思想や宗教はそれまでの池泉庭園と同様であるが、水をつかわないという特殊な表現方法は、庭園の芸術性をさらに高めた。『作庭記』にも、「池もなくやり水もなき所に石をたつこと、これを枯山水と名づく」とある。枯山水は水を一滴

も使用しないで水の表現をするという抽象表現による庭園様式である。この時代は、庭園の敷地は非常に狭く、たとえば京都・龍安寺の方丈前の石庭と並んで枯山水庭園を代表する大仙院庭園などは約 31 坪（約 100 平方メートル）と狭小であるが、白砂を敷いて海洋の姿とし、岩を配して山あるいは島に見立てるといった表現方法によってわが国独自の庭園様式を確立した。戦国武将や大名の登場が庭園文化の進展を促し、城郭庭園がさかんに造られた。徳川幕府の統治下では、将軍や大名などを中心に、城や屋敷を築く際に庭園内を回遊することができる回遊式庭園が造られるようになり、池泉を中心とした大名庭園が各地に作られた。この庭園のきわだった特徴は、古くからある池泉回遊蓬萊式庭園に各地の代表的な風景を縮景でとりこんだところにある。大名庭園はこれまでの日本庭園技術の集大成である。

その一方で、茶の湯の発展とともに、茶庭（露地）という新たな庭園意匠が出現した。茶庭（露地）は、武士だけではなく庶民の間にも普及していった。この時代のもう一つの大きな特色は、この茶の湯のための露地が創案されたことである。それまでの庭園はすべて観賞するためか、あるいは舟遊びや遣水にみられるような文学的遊びの庭であったが、露地はそれまでの庭の性格とはまったく異なる、茶室に入るための実用の庭であった。それも最初は「面（おもて）ノ坪ノ内」とか「脇（わき）ノ坪ノ内」とかよばれて、せいぜい 1~4 坪くらいの狭い庭空間で、植栽はなく、坪の外は松林とか大きい松が 1 本あるのみの簡素なものであった。それがしだいに意匠を整え、雨の日のために敷石や飛石が考案され、手水（ちょうず）鉢や石灯籠、垣根などが取り入れられ、茶室に至る通路としての佗（わ）びた庭の体裁を完成させたのである。この露地の意匠は一般の庭園にも応用され、現在にまで及んでいる。

衆の時代

「衆の時代」の庭園

西洋庭園　和洋折衷庭園　市民公園

明治期以降の庭園

明治時代になると実業家を中心に、西洋の邸宅にある芝生面を広くとった明るい庭を真似た庭園が多く造られた。またこの時代から、西洋庭園の新しい造景がもたらされ、新しい要素が加わり変化したが、建築物における鹿鳴館と同様に多くは和洋折衷式であったために、不自然さが目立っている。代表例には、無鄰菴庭園（京都府）や三溪園（神奈川県）また日比谷公園（東京都）がある。

4. 引用文献・参考資料

引用文献

- (1) 村上公久『自然保護と環境保全：「保続的（持続的）発展」を支える思想』2011/3 聖学院大学論叢 23-2
- (2) 村上公久『中項目 環境思想』，「情報教育事典」所収2008/1 丸善
- (3) 重森三玲『日本庭園史年表他』（『日本庭園史大系』第34巻（別巻第1巻）1976/7 社会思想社 ASIN：B000J92N0C
- (4) 内藤湖南「白石の一遺聞に就いて」『先哲の学問』所収 2012 筑摩書房
- (5) 梅棹忠夫「近代日本文明の形成と発展」『日本とは何か』所収1986 日本放送協会
- (6) William Hardy McNeill *A World History*: Oxford University Press; 4th edition. 1998（初版1967）ISBN 0-19-511616-X
- (7) Katsuro Hara, *An Introduction to the History of Japan*, 1920 G. P. Putnam's Sons

参考資料

1. 「大勢三転考」と伊達千広に関する文献・資料

「大勢三転考」

本書は明治六年の公刊以後、『伊達自得翁全集』『日本哲学全書』10などに収められ、『歴史思想集』（『日本の思想』6, 筑摩書房）『近世史論集』（『日本思想大系』48, 岩波書店）で校注が行われている。鈴木英雄『日本思想大系48 近世史論集』所収「大勢三転考」の校注、「惣領制小考」（『学習院大学文学部研究年報12号，1966年）がある。

松本彦次郎『史学名著解題』，高瀬重雄『伊達千広』

小沢栄一『近代日本史学史の研究』幕末編，内藤虎次郎「白石の一遺文に就て」（『内藤湖南全集』9所収）

尾藤正英「日本における歴史意識の発展」（『（岩波講座）日本歴史』22所収）

石毛忠「「大勢三転考」における時代区分法とその思想的根拠」（石田一良編『時代区分の思想』所収）

千々和実「「大勢三転考」に於ける史観」（『史潮』5）

荒川久寿男「伊達千広の「大勢三転考」について」（『皇学館論叢』13-6）

伊達千広の著書

『大勢三転考』のほか，九年の幽囚生活中の歌文集『余身帰』，晩年の思想を伝える随想集『随々草』や『随縁集』『枯野集』『幣帛袋』『竜神出湯日記』『三の山踏』『夕日岡月次集』などの随筆集・歌文集・紀行文があり，『伊達自得翁全集』も編まれている。

高瀬重雄『伊達千広』

2. 引用文献（7）に関して，

原勝郎 *An introduction to the history of Japan* Yamato Society publication G. P. Putnam's Sons, New York 1920年（大正9年）

3. *Variations in value orientations*. Kluckhohn, Florence Rockwood and Fred L. Strodbeck. 1961. Oxford, England: Row, Peterson.

4. 筆者の「自然観の違いについて3つの型」に関する文献

(引用文献の(2)の部分抜粋)

村上公久『中項目 環境思想』、『情報教育事典』所収 2008/1 丸善 pp. 109, 110

原自然、自然、環境と文明

ヒトの出現以前の世界や、ヒトが未だその足を踏み入っていない手つかずの自然を「原自然」と呼ぶことにする (wilderness ウィルダネスという語に対応する)。ヒトが現われて、その活動が及び始めたが未だ人為が強く影響を与えていない部分を「自然」(nature)と呼ぶ。やがて自然の中でヒトが暮らし始め、さらには道具を使うなどしてヒトが強く自然と関わり始めると、ヒトにとってその自然は「環境」(environment)へと変質する。つまり、ヒトの登場によって原自然が自然になり、文明を持ったヒトの動物以上の生活が始まるとヒトにとって自然が環境となる。

3つの文化型

人類の歩みを、どのように自然と関わってきたかを Florence Klachholz の分類を援用して観ると、

A : nature — over — man (自然が、未文明の人間を支配) over は、支配関係

B : man — over — nature (人間が、文明によって自然を支配)

C : man — in — nature (自然の中に共生している人間)

の3つの型に分類することができる。Aの段階にとどまっていた頃、動物の一種であったヒトは「川原に生える一本の葦」のように弱く、大自然の脅威の下で辛うじて生きていたが、やがてこの「考える葦」は、火と道具を用い技術を発達させながら自然を制御し始め、文明を興しやがて科学技術を駆使して自然を支配し始めBの段階へと進んで行く。これまでのところAを脱してBに向かいさらにBを推し進めることが、すばらしい「進歩・発展」だった。「人類の歴史とは」と問われれば、「AからBに向かう歩み」と答えてもよいだろう。しかし今、その過程で環境問題が起こり人類が苦しんでいる。人類は文明によって自然を支配しman-over-natureを達成した。悲劇的なことに、達成した途端、人類は環境問題つまり生命環境の急激な劣化を引き起こしてしまい、他の生物種を巻き込んで滅びようとしている。

Cの型の「人間と自然との関係」は、自然か人間かどちらが支配者か、という観方とはまったく違って「共生」の関係を示している。

破壊と保護の対立から「保全」へ (BからCへ)

「原自然」の中に登場したヒトはその賢さによって「自然」を「環境」へと変えてゆき環境問題を起こした。現在「地球環境問題」を巡って最大のディレンマは「開発か環境か」の対立である。つまり、生きてゆくために「破壊・掠奪」(destruction, abuse)する立場と「保護」(protection, preservation)の立場の激しい対立・対決である。人間の「環境管理」の責任はこのふたつの立場の対立に関わるものではなくて、実は第三の立場「保全」(conservation)なのである。地上に(主張する本人を含め)自然を消費して生きるヒトが全くいないかのように「保護」を唱えても解決にはならない。人間の「環境管理」の責任は、破壊と保護、これらのいずれでもなくて生命圏の生態系を育みつつその余剰の生産物をヒトが消費する「保全」の実行にある。

従来の倫理学は人間を自然と区別して扱ってきた。倫理は人と人との関係を正しくすることから始まり、個人と社会との関係を考えるものへと発展してきた。しかし人間と自然との関係についての倫理はまだはっきりとは見えていない。アメリカのエコロジスト アルド・レオポルド (Aldo Leopold

1887-1948)は、人間と自然との関係が「人間は(自然を利用し支配する)特権を主張するが、義務を負わない」ことを批判し、「土地の倫理」The Land Ethicを提唱した。レオポルドは「共同体」という人間社会に限られていた概念を土、水、植物、動物に拡大しこれらを「土地」ということばで象徴的に表現して拡大された新しい倫理を提唱した。「土地」とは現代では「生態系」エコ・システムという表現になるだろう。レオポルドの土地の倫理は、アメリカ合衆国の新しい自然保護や環境保全に関する連邦政府の重要な法律の基礎理念となっている。人間が、自分自身を自然を形づくる多くの仲間の一員、と自覚することから環境問題に取り組む新しい道が始まる。

History of Japanese Garden and Periodization of Japanese History: Japanese Garden Style Transition, which agrees with the “Taisei Santen Kou”

Kimihisa MURAKAMI

Abstract

Gardens are a reflection of people's view of nature and view of life. When we appreciate gardens, we may come close to the view of nature or the sense of values behind the garden layout derived from those values. When we look back at the history of Japanese gardens and try to comprehend changes in garden styles, we need a clear “periodization of Japanese Garden History”. The periodization used so far for that purpose has followed the periodization for general Japanese History: the Nara Period, the Heian Period, the Kamakura Period, the Edo Period. This periodization only refers to the geographical location of political power and does not indicate the cultural climate, nor the *Zeitgeist* (the spirit of the times) which influenced transitions in garden styles.

Employing the “Taisei Santen Kou” (The Consideration of the Three Ages Shift) by DATE Chihiro (1802~1877), the author tries to introduce a new periodization of Japanese History which may well coincide with the Japanese Garden Style transition; The Age of Clans (The Age of Blood Relationship: The Asuka Period); The Age of Office (The Age of Official Postings: The Nara and Heian Periods); The Age of Titles (The Age of Feudal Rank: The Kamakura, Muromachi, Azuchi-Momoyama, and The Edo Periods), and The Age of People (The Age of Democracy: The Meiji, Taisho, and Showa Periods)

Key words: Japanese gardens, history of Japanese gardens, periodization of Japanese History